

1 1	海部	愛西市立立田北部小学校	トミイタ チカ ・ キムラ マサナリ	
			名前	富板 知香 ・ 木村 将成
分科会番号	6	分科会名	生活科教育	

学びの思いや願いをもち、自ら広げていく児童の育成

一人とのふれあいの中での学びを通して

1 主題設定の理由

愛西市の西に位置する本校は、木曽川の流に育まれた豊かな水郷地帯である。周囲を田や蓮根畑に囲まれており、自然豊かな場所にある。古くから稲作や蓮根作りが盛んで、農業を営む家庭もある。本校では、5年生の田植え、稲刈り体験、3年生の蓮根堀り体験をはじめ、各学年や地域の特性を生かして人や自然と関わり合う活動を行っている。また、野菜の栽培活動についても地域の方の協力を得ながら行い、児童は地域の方や地域そのものへの関わりを深めている。本校の児童にとって、農業は身近であるがゆえ、「野菜や稲が育てられていて当たり前」という感覚がある。そこで、本実践を通して、野菜や稲は多くの人々の苦勞によって育てられていることに気付くきっかけになればと考えた。

本校は全校児童数 120 名の小規模校である。児童は人懐っこく、人と関わるのが好きである。しかし、関わり方をみると、受動的であり、体験活動で得たであろう思いや考えを生かしたり、表現したりすることが苦手である。そこで、1・2年生では体験学習を主とする生活科の学習を中心とし、身のまわりのひと・もの・ことと触れ合いながら思いや願いをもち、それらを実現しようと主体的に活動する中で、学びの楽しさを感じさせ、体いっぱい表現できる児童の育成を目指したい。また、一人一人の児童の思いや願いを生かし広げていくことで、満足感や成就感を味わわせ、自立して生活できる力を育てていきたい。

本研究では、学習指導要領に示された「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」の(7)動植物の飼育・栽培を扱う。栽培活動を通して児童自身と身近な人々や社会及び自然と触れ合ったり関わり合ったりすることで、それらのよさや大切さに気付くとともに自分自身のよさや可能性に気付く、意欲と自信をもって生活することができるようさせたい。さらに、他教科や3年生以降の学習ともつながるよう実践研究を進め、自分の生活をより良いものにしていく意欲にあふれる児童の育成を目指していきたい。

2 研究の方法

(1) 研究のねらい

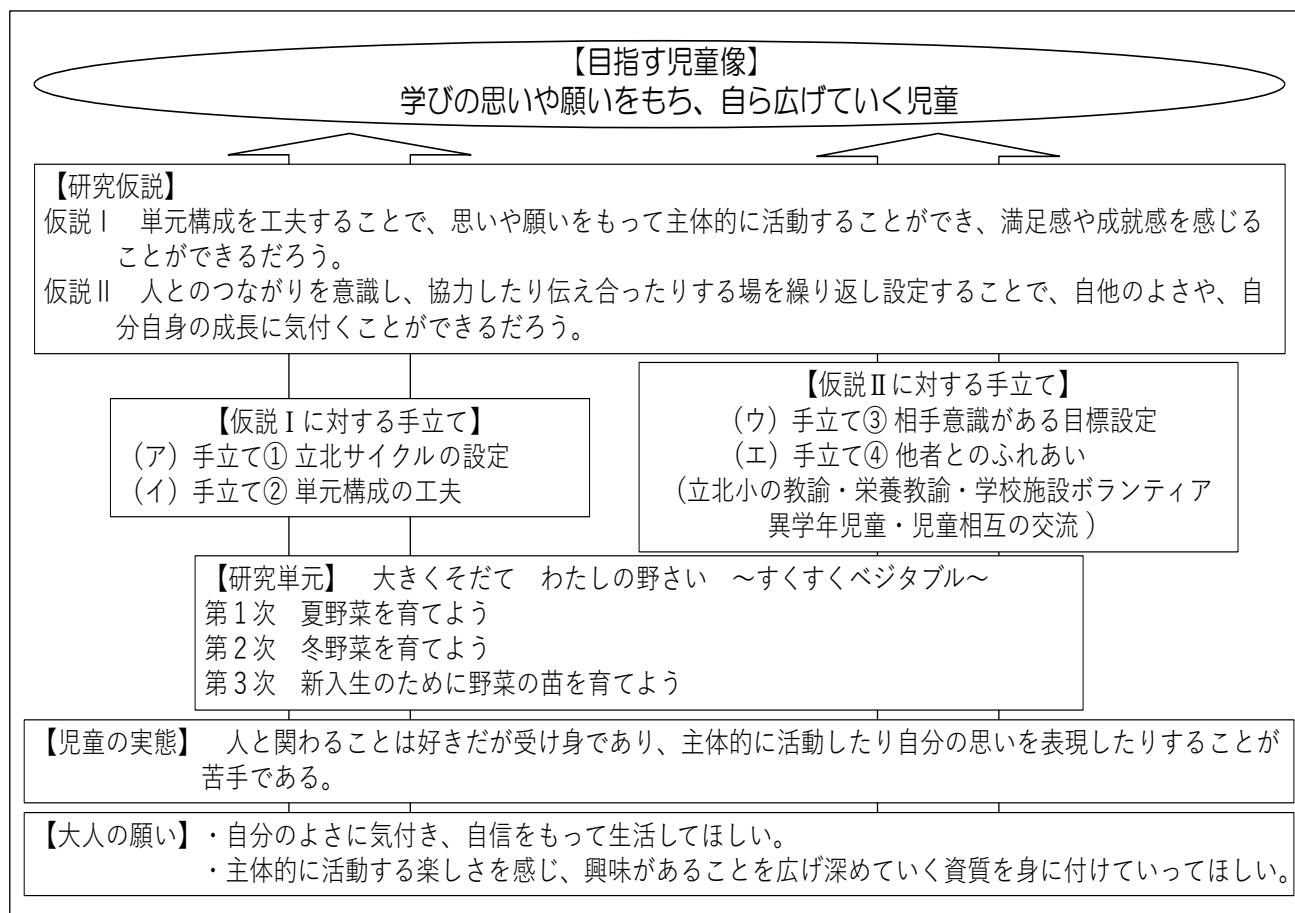
野菜の栽培活動を通して自分の思いや願いをもち、それらを実現するために主体的に活動することで、学びの楽しさを感じ取り、自分自身の生活に広げていくことのできる児童を育てる。

(2) 研究の仮説

仮説Ⅰ 単元構成を工夫することで、思いや願いをもって主体的に活動することができ、満足感や成就感を感じることができるだろう。

仮説Ⅱ 人とのつながりを意識し、協力したり伝え合ったりする場を繰り返し設定することで、自他のよさや、自分自身の成長に気付くことができるだろう。

(3) 研究構想図



(4) 研究の手だて

手だて①（仮説Ⅰに対する）

立北サイクルを設定し、活動を行う。

手だて②（仮説Ⅰに対する）

自己の成長に気付くことができるように単元構成を工夫する。

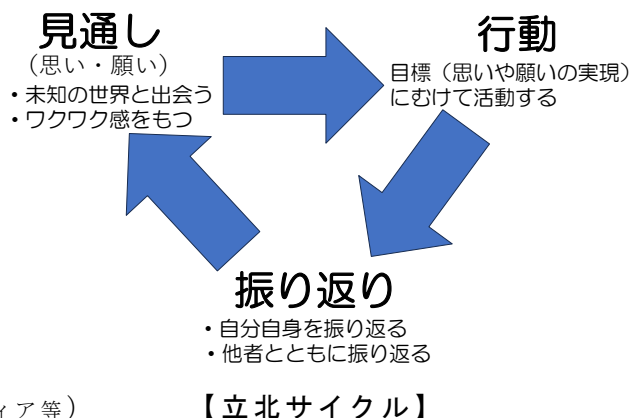
手だて③（仮説Ⅱに対する）

自分の思いだけでなく相手の立場に立った目標設定をする。

手だて④（仮説Ⅱに対する）

他者と触れ合う機会を設ける。

（児童同士、本校教諭、栄養教諭、学校施設ボランティア等）



3 研究の概要

(1) **対象** 令和7年度1年生 19名(男子14名 女子5名)
2年生 13名(男子5名 女子8名)

(2) **研究単位** 「大きくそだて わたしの野さい」～すくすくベジタブル～

(3) 単元の目標

野菜を継続的に育てる活動を通して、野菜の育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけ、それぞれの野菜に合った世話の仕方があることや野菜が生命を持っていること、成長していることに気付くとともに、野菜に親しみをもって大切にすることができるようになる。

(4) 単元の展開

今回の研究実践

	時数	見通し (思い・願い)	行動	振り返り →予想される次時への思いや願い	人との関わり
第1次	7時間	夏野菜を育ててみよう	苗植え・水やり 野菜の看板づくり	収穫できてよかった →もっと育てたい	・学校施設ボランティア ・農業団体職員
第2次①	8時間	冬の野菜を育てたい	苗植え・水やり・除草・収穫 野菜の看板づくり	夏野菜よりも一生懸命育てることができた →みんなで食べたい	・栄養教諭 ・高学年児童 ・高学年教諭 ・家庭科担当教諭 ・学校施設ボランティア ・校務主任
第2次②	3時間	どんな食べ方がおいしいかな	栄養教諭にインタビュー	栄養について知れた →早くみんなと食べたいな	
第2次③	3時間	学校でみんなと食べたい 野菜パーティーをしよう	5年生と調理	一緒に食べるとおいしいね →また育てたいな	
第3次	3時間	新入生にプレゼントする野菜を考えよう	種まき・水やり	喜んでくれるといいな 芽が出てうれしい 芽が出なかった種があるのはなぜだろう	・学校施設ボランティア ・校務主任

(5) 単元の評価規準

- ・ 野菜を継続的に育てる活動を通して、それぞれの野菜に合った世話の仕方があることや野菜が生命をもっていること、成長していることに気付いている。

(知識・技能)

- ・ 野菜を継続的に育てる活動を通して、野菜の育つ場所、変化や成長の様子に関心をもって働きかけている。

(思考・判断・表現)

- ・ 野菜を継続的に育てる活動を通して、野菜への親しみをもち、大切にしようとして

(主体的に学習に取り組む態度)

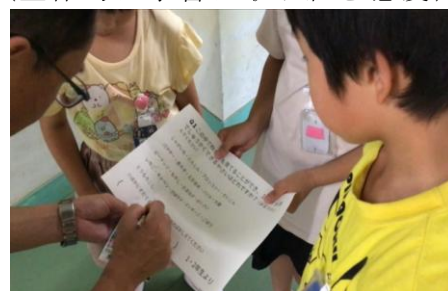
4 研究の実際～第2次「冬野菜を育てよう」の実践～

第2次① 見通し 冬野菜を育てる

9月、第1次実践の夏野菜収穫を経て、1・2年生の児童はもう一度野菜を育ててみたいという思いをもった。そこで、校内の野菜名人の校務主任や学校施設ボランティアの方に「早くおいしく育てられる秋・冬野菜はなんですか」と質問をしに行き、キャベツ、ブロッコリー、大根、白菜、なばな、ねぎの6種類を育てることにした【写真1】。

10月に学校施設ボランティアの方と一緒に冬野菜の苗を植えた。夏野菜の栽培時には栄養が十分にいきわたらず、病気になってしまった野菜があったため、その反省を生かし、休み時間になると雑草を自主的に取りに行く姿が見られた。

栽培活動が続ける中で、最初は小さかった苗が、とても大きなブロッコリーやキャベツになっていることに児童は驚き、夏野菜とは異なる冬野菜の成長の変化に気付くことができた。



【写真1 質問をする児童】



【写真2 冬野菜の収穫】

第2次① 行動 冬野菜の収穫

1月に育てた冬野菜を収穫した【写真2】。野菜を収穫した児童たちから「おいしそう。みんなで食べたいな」とのつぶやきが聞かれた。

第2次② 行動 栄養教諭への質問と授業

ブロッコリーとキャベツを収穫した児童は「おいしく食べる方法を知りたい」という思いや願いをもった。「栄養に詳しい人に聞きたい」「一番体にいい野菜は何か？」「苦手なブロッコリーをおいしく食べる方法は？」「足が速くなる野菜はある？」「背が伸びる野菜は？」と、さまざまな疑問をもち始めた。そこで、児童の疑問を解決するために、愛西市学校給食センターの栄養教諭に来ていただき、事前に児童から出た「野菜に関する質問」に回答していただく形で出前授業を行った【資料1】【写真3】。授業後には、進んで質問に行く児童もいた。栄養教諭の授業を受けて栄養や調理方法についてもっと知りたいという思いをもつとともに、みんなで野菜を食べたい・育てたいという思いが一層高まった。

第2次③ 行動 野菜パーティー

栄養教諭と家庭科担当の教諭のアドバイスを得て、1・2年生は「収穫したブロッコリーとキャベツを調理して、みんなで一緒に食べたい」という思いを強くした。そこで学級内で話し合いをしたところ、「1・2年生だけでは調理できないから5年生にお願いしよう」という意見が出たため、5年生に協力をお願いをしに行った。5年生の教室では、今回調理をお願いするキャベツ・ブロッコリーの紹介と、世話をするにあたって草抜きや水やりをがんばったこと、そして、「一緒に野菜パーティーをしたい」という思いを伝えた。5年生は大喜びで「任せてください」と張り切っていた。

野菜パーティー当日、1年生が野菜を水で洗い、その後2年生が野菜を切った。5年生は、家庭科で学んだことを生かして「猫の手で切ると手が危なくないよ」と2年生にとっても優しく野菜の切り方を教えていた。2年生はそのおかげで安心して調理することができた【写真4】。栄養教諭に「野菜は蒸して食べるのが一番素材のよさを引き出せるよ」と教わった通りに調理して食べてみると、「甘い」「今まで苦手だったけど、これなら食べられる」などと、驚いていた。「自分たちが育てた野菜だからおいしいね！」「もっと食べたい！」という声もたくさん出た。1年生からは「嫌いなキャベツもおいしく食べられた」「できたてはおいしかった」などの声が聞かれた。

第3次 振り返り→見通し 1年間を振り返る

1・2年生ともに、2月にこれまでの栽培活動の振り返りを行った。夏野菜、冬野菜を育て収穫したことが楽しかったこと、野菜が好きになったことなどの感想があがった。その後、「野菜の成長を振り返る授業」のやり取りの中で、学校で育てた野菜は誰かが種から育てた苗をいただいたこと、実は後はまた種になることも気付くことができた。

また、授業の中で1年生からは「今年は苗から育てたから、種から育ててみたい」、2年生からは「新1年生には自分たちで育てた苗をプレゼントしたい」という意見が出た。

T:野菜の食べ方についての質問に答えていくね。野菜を食べるのが好きな人？

S:はい。いいえ。

T:自分たちが育てた野菜を食べたことがきっかけで野菜が食べられるようになったことがあるんだよ。

S:そうなんだ。キャベツだとどんな食べ方がおいしいの？

T:蒸して、いろいろな味のドレッシングで食べることがおすすめだよ。

S:ブロッコリーだと？

T:カレー粉をまぶした小麦粉で揚げるとおいしいよ。家の人にやってもらわないといけないけどね。

S:分かった、やってみるよ。

【資料1 野菜の食べ方についてのやり取り】



【写真3 栄養教諭さんに聞きました】



【写真4 いっしょに作ったよ】

第3次 行動→振り返り 種を選んで植える

前時を踏まえて、児童には種から育ててみたい野菜を自由に考えさせた。野菜に興味をもたせるために、児童が考えた中から育てやすい野菜の種を校務主任が10種類ほど用意した。大きさ、形、色が違う種を提示し、実際に触ってどの野菜の種なのかを想像させた。答えを発表すると「かぼちゃの種はこんなに大きいんだ」「エダマメの種はこんな形をしていたんだ」などと驚いている様子だった。

その後、一人につき1ポット用意して自分で選択した種を植えた。アサガオの種を植えた経験を生かし、「大きく育てね」「ちゃんと生えてね」等と声を掛ける様子が見られた。

種は、発芽したものとしなかったものがあった。発芽しなかった原因として、児童は「水をあげすぎたかもしれない」「寒かったからもっと太陽に当ててあげたらよかったかな」とこれまでの栽培経験をもとに予想し、これからの野菜栽培に生かそうとする姿が見られた。

令和8年度 4月以降の活動 行動

3年生に進級した児童は、新1年生に自分たちで育てた野菜の苗をプレゼントした【写真5】。「丁寧に水やりをするといいよ」「大事に育ててね」などと、自分自身の経験を基にアドバイスする姿が見られた【資料2】。苗をもらった新1年生は「毎日水やりをがんばる」と意欲を高めていた。



【写真5 苗のプレゼント】

5 研究の考察

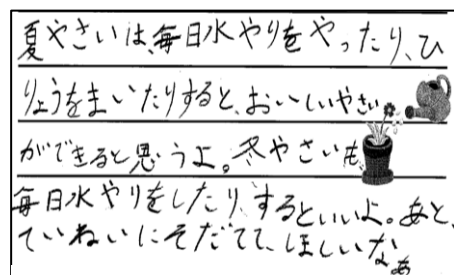
(1) 仮説Ⅰ（手立て①②）について

「見通し、行動、振り返り…」というサイクルを繰り返しながら第1次から第3次まで授業を行った。第1次の夏野菜を育て始めたころは、児童の野菜に対しての関心は低かったが、看板づくりを行ったり、野菜に水をあげたりする中で「おいしく育てるためにはどうしたらよいだろう」と、野菜に対して愛着をもち始め、主体的に活動することができた。

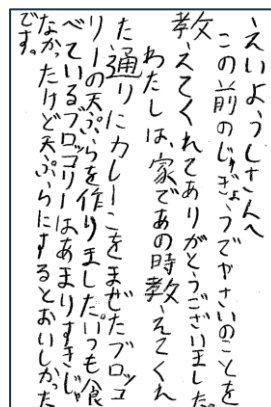
第3次の実践では、第1次の夏野菜の栽培の経験を生かして、「見通し」の場面では、「新1年生が育てやすく、季節に合った野菜を選んだほうが良い」と予想することができた。また、「行動」の場面では、水をやるだけでなく、肥料をやることにも目を向ける児童もおり、学習の質を高めることができた。このことは、野菜への意欲的な働きかけが「気付き」を生み、その気付きを手がかりに「さらによい育て方は？」という思考の循環ができたからだと考える。2学年間にわたって繰り返し野菜を育てる中で、さまざまな野菜を自分たちの力で育てることができた経験は、児童に満足感を与えたと考える。また、野菜パーティーを成功させたり、新1年生に夏野菜の苗をプレゼントしたりすることができた経験は確かな成就感を与えたと考える。

(2) 仮説Ⅱ（手立て③④）について

第2次において、「野菜パーティーを一緒に行いたい」という願いをもち、自分たちの思いを異学年とともに実現することができた。また、第3次においては、新1年生にプレゼントする夏野菜の苗を選ぶ際に、「新1年生が育てやすい野菜の方がいいね」と考えることで相手意識をもって学習活動に取り組むことができた。苗づくりを通して、第1次で植えた苗は簡単には育てられないことに気付いた児童は、7月に容易に収穫できた野菜は、多くの人の苦労があって収穫できたこと、野菜作りは実は難しいということを感じていた。周りの方の協力があって、野菜作りができていることに気付いた児童は、学校施設ボランティアの方に「や



【資料2 1年生へのアドバイス】



【資料3 感謝の手紙】

さいの種のまきかたや、やさいのつくりかたをおしえてくれてありがとうございます」と手紙を書いた。実践を通して人とのつながりに気づき、感謝の気持ちをもつことができた。

野菜の栽培や収穫、栄養教諭による出前授業、野菜の調理など、他者とたくさん関わる機会を設けることで、「野菜パーティーをしよう」では、「ありがとう。とてもおいしかったです」という5年生へのお礼の手紙を書き、感謝の気持ちをもつことができた。また、栄養教諭からの専門的なアドバイスに対して、家で実際に実践した児童もあり、「苦手なブロッコリーもおいしく食べることができました」と感謝の気持ちを具体的に表すことができていた【資料3】。

(3) 児童の変容

① 1年生児童A

夏休み前の様子	3月末の様子
①野菜との関わりに関して	
- 家庭が農家で、身近に農作物がある環境ではあるが、野菜を育てることが当たり前で、家族が苦勞して農作物を育てていることにまで思いが至っていない。 - 服が汚れるのが嫌いで、除草作業を嫌がる。	- 毎日野菜に水やりを行ったり、除草作業をしたりすることを通して、農作物を育てる苦勞や大変さに気付くことができた。 - 学校で勉強したことを基に家で米づくりについて父親に聞いた。水の管理、温度の管理が難しいことを知るとともに父親ががんばって米づくりをしていることに気付いた。
②人との関わりに関して	
- 人懐っこく仲のよい友達とは楽しく生活することができる。 - 些細なことで友達に対して攻撃的な言葉を発してしまうことがある。	友達と声を掛け合って水やりを行ったり、野菜の成長を共に喜んだりする体験を通して、仲間と仲良くすることができるようになった。

② 2年生児童B

夏休み前の様子	3月末の様子
①野菜との関わりに関して	
1年生の時に行ったアサガオの栽培には興味を示したが、あまり熱心に水やりを行うことはなかった。 - 野菜が苦手で、給食の野菜を残すことが多かった。	- 冬野菜のキャベツとブロッコリーを調理した体験を通し、「おいしかった」という感想をもち、他の野菜の栽培にも興味をもった。 - 野菜のおいしさに気づき、給食でも残さずに食べる回数が増えた。 - 新入生に喜んで欲しいという思いから、水やりを欠かさずにするようになった。
②人との関わりに関して	
自分の思いはもっているが、他者との接し方が分からず、自分の気持ちをうまく伝えることが苦手である。	- 水やりや野菜の収穫を通して協力することの大切さを学んだ。 - 成功体験や他者と関わる経験を積んだことで、自信をもって自分の思いを伝えられるようになった。

6 研究の成果と課題

(1) 成果

- 同じサイクルを繰り返すことで、児童は「振り返り」で感じた自らの思いや願いを、次のサイクルの「見通し」につなげ、学んできた知識や経験を生かして、主体的に活動に取り組むことができるようになった。
- 栄養教諭や他学年との交流は、児童にとって「思いや願いを実現するよさ」「協力することの大切さ」を実感する機会となった。特に、野菜が苦手だった児童が「おいしい」と感じ野菜を食べられるようになったことは、自分の生活をよりよくしようとする態度につながった。
- 学校施設ボランティアの方をはじめ、「たくさんの人に支えてもらっている」という実感が、「今度は自分たちが下級生に何かをしたい」という願いを生み出した。
- 第1次（育ててみよう）→第2次（他学年と一緒に食べたい）→第3次（下級生のために）と段階を踏むことで、他者のよさに気付くとともに、自分も誰かを喜ばせたという自信にもつながった。

(2) 課題

児童の思いや願いをもとに単元を構成していこうと意識したが、児童の思いや願いを引き出せるような発問や単元構成を工夫する必要がある。また、新1年生のための苗を育てる実践では、年度をまたいでしまい、春休み期間の世話ができなかった。